

特集

重症心身障害児・医療的ケア児の 「楽」をともにつくる

“^{らく}楽さ”と“^{たの}楽しさ”へのアプローチ

特集に
あたって

からだの“^{らく}楽さ”，こころの“^{たの}楽しさ” 重症心身障害児・医療的ケア児へのケアが目指すもの

一般的に重症心身障害児や医療的ケア児への看護は、個性の高いケアが必要であるといわれています。こども一人ひとりの状態に合った呼吸や姿勢、睡眠、排泄などの生命を支えるケアは日々繰り返される重要なケアであり、看護師は緊張感をもって向き合う場面も少なくありません。また、はじめて出会う重症心身障害児や医療的ケア児のケアにかかわったとき、「このケアで本当によいのだろうか」「こどもを苦しめていないだろうか」と、戸惑いや不安を感じた経験をもつ看護師は少なくないでしょう。教科書やマニュアルに書かれていることと、目の前のこどもの反応が一致しない場面に出会い、判断やケアのあり方に迷うこともあります。そのようななかで私たちは、「この子は今、楽だろうか」「少しでも心地よく過ごせているだろうか」と、こどもの状態をアセスメントしたり、こどもの気持ちを感じ取ったりしながらかかわっています。

本特集で取り上げる「楽」という言葉には、2つの意味を込めています。1つは、こどもの苦痛や不快が和らぎ、からだの状態が落ち着く“^{らく}楽さ”です。呼吸が整い、姿勢が安定し、眠りや排泄が苦痛なくスムーズになるといったように、からだか“^{らく}楽”になることで、こどもの表情や反応がふつと緩む瞬間や安寧な雰囲気に包まれる瞬間があります。もう1つは、人々や環境とのかかわりのなかで生まれる“^{たの}楽しさ”です。遊びや声かけ、私たちとの触れ合いを通した相互作用において見せてくれる、笑顔やいつもとは違うきりとし

たような表情、ささいな反応の変化などは、こどもが着実に成長・発達の過程を歩んでいる確かなサインでもあります。

私たち看護師は、そうした小さな変化を見逃さず、こどものペースに合わせてかわりや環境を調整しています。からだの“^{らく}楽さ”のためのケアは、日々の観察とケアの工夫の積み重ねであり、“^{たの}楽しさ”をつくるケアは、こどもと同じ環境にいて、その反応を受け止め、ともに過ごす時間そのものから芽生えるとも言えるでしょう。

本特集では、重症心身障害児・医療的ケア児にとっての「楽」の意味を改めて考え、苦痛の緩和や呼吸、ポジショニング、睡眠、排泄といったからだの“^{らく}楽さ”のためのケアを整理します。さらに、“^{たの}楽しさ”をつくるかかわりの工夫を紹介し、病棟、通所施設、訪問看護など、さまざまな場面での実践を取り上げます。そこには看護師一人ひとりが施設全体と試行錯誤しながら築いてきたこどもとともにつくる「楽」があります。

本誌を手にとっていただいた皆さんと、重症心身障害児・医療的ケア児とともにつくる「楽」について考える機会としたいと思います。

仁宮真紀 Ninomiya Maki

旭川荘療育・医療センター看護部教育部長／
小児看護専門看護師